

‘ό κόσμος, ἀλλοίωσις. ό Βίος, ὑπόληψις.’

LIVE: FAITH NO MORE 1991.10.2 中野サンプラザ



大歓声に迎えられてメンバーが登場してステージがはじまったのだが、私の席から3段くらい下のななめ前で、まっ先に向いて立っている警備員のおかげで、ステージのちょうどまん中が見えずられて見えない。おまけにその警備員は、私のすぐ横の通路をひっきりなしに行ったり来たりするし、前で立っている時は体を左右に動かす気になって仕方がない。気にせずになんとかステージに集中しようとしても全然うまくいかない。

FAITH NO MOREの音楽も私にはつかまえにくくて、それとも格闘させられてしまう...。でも途中でギブアップせずになんとか音楽についていこうと決めて、気になっていたものをとりのぞくことにした。警備員をとりのぞくといわゆるにはいかないので、椅子子にすわって目を閉じてきはじめた。

FAITH NO MOREの音楽は、多彩、多面、多角、多面...と実に「タ」で、私のあわざるところがなかなかまとまらない。だけどさうしているうちに、ヴォーカル、ギター、ベース、ドラム、キーボードのバランスがすばらしくきまっていることに気がついた。ヴォーカルとか、ギターとか、ひとつだけにひっぱられることが全くない。超いいバランス! そして、新曲といってはじめた曲くらいから、やっと私の番がまわってきたって感じになつてひきつけられていった。最後の歌なしの曲は圧倒的だった。

アンコールになって警備員がいなくなつたので、立ってステージを見ながらくことができた。音楽はあんなに「タ」なのに、ステージは実に「単」。しばらくしてまた警備員がもどってきて、もう気にならなかつた。ライブも終ったとは、座禅をしたときのように寝覚のあたりがすっきりとして爽快だった。

LIVE: テイラノウルス 1991.9.27 渋谷ラママ

7月15日のライブから、ベースとドラムの人人が新しいよって、あのとき感じた耳に入ってくるもの、目に見えているものもみんなツギハギ。私のバチもツギハギといふことはなくなり、まとまつた感じで、最初の2曲くらいはいいなアと思った。だけど、そのあとあたりからすこしひまちがへんになってきた。ギターはじめて聞くまで、ギターの人もはじめて見る人のようだ...。私はとまどつていた。このあたりマークボラン追悼ライブのアコースティックのT.REXで、あのギターをきいて、すごく心にひびいてきたんだけど、それはこれまで私の空っぽいたテイラノウルスのギターからみ出でていて、だからテイラノウルスのギターをとおしてしか知らないかったものは、あのギターの人の全部ではなくて、ある部分だと感じてしまったのだけど。でもその発見は、あのライブではふるえるくらいの感動だったんだけれど、この日のライブでは、とまどつを感じさせるものだった。

LIVE: THE COOL BEAUTY 1991.9.25 新宿 アンティック

はじめからパワフル。歌がきとりやすく、歌詞に力を感じた。前回(7月13日)見たときは、拳を振りまわして、まく方に迫ってくるというステージだったが、この日は拳を握りしめてそこにズシッと存在しているという迫力のあるステージだった。ヴォーカルとベースの人のコラボがすばらしく合っている。

「リアル」という歌と「だから」(多分こういうタイトル)がすこしかった。前回のときに感じた「客観的でもあり主観的でもある」といった距離感がこの歌にはなかった。「大人とガキのあいだには、いつも見えない壁があるじゃねえか」、「お前と俺のあいだには、いつも見えない争いがあるじゃねえか」というふうな歌詞がそれを活かす無駄のない演奏に力を与えられて、まく者の心に伝わってくる。

41号 1991.10.9

文・編集・発行

恋 怪子

LIVE: THE WAIATS 1991.10.4 高円寺 20000円

8月20日以来のライブで、たいして間があいたわけじゃないのに、ものすごく長い間書いていなかったような感じがしていた。最近は前に録ったライブテープも書いていなかったし、書けない。

「サブウェイ・ストーター」ではじまった。そのとたん、あ、これだ! ってなつてグットヒキこまれた。これだ! といふのは THE WAIATS だけのもの、ということだから、THE WAIATS だけにしかつくり出せないものだから、きていい。現在は、私にはとりかえのきかない、かけがえのない時間。この日のライブに行こうか行くまいが一瞬ち迷つたわけじゃないのに「来てよかった!」と思つた。久しぶりにきく「SHOTGUN BOY」。「あいつはいつもひとり通りをぶらついて...」ってヴォーカルの人が歌いはじめたとたんに、心の中から涙が急ないの流れのように流れ出てきた。この歌のあたりから体が熱くなってきた。ライブハウスの中が暑いわけじゃないのに、背中も額も汗をかいだ。にぎりしめていよいよ手からは汗がぽぼぼと落ちるくらいの感じ。THE WAIATS をきいていると、私のシンガ「強烈」に作動して、熱波をつぎつぎと全身に送りこんでいく。だから汗といつても全然不快なものじゃなくて、そのときにあふれている熱い涙とおんほじもの。そういう状態で最後まで。THE WAIATS が熱源といつてはなくて、私の熱源を THE WAIATS の音楽が強烈に刺激する。ことばをかえていえば、THE WAIATS の音楽に、私の共鳴板が最大限共鳴したということだと思つ。

LIVE: フランク・ギャンバー・バンド 1991.9.14 新宿 ピットイン

一曲目がはじまってすぐに「すごい、この人のギター」と思つた。目が自然とギターとギターを弾いているフランク・ギャンバーの手にすいせられていった。テクニックのことなどにも知らなかったから、それにおどろいていたのではなくて、そこでおきていた神秘、というか、奇跡か、というか、それにおどろいていたのである。

何曲かきいていくうちに、ジャズのようになってきて、ピアノではなくてキーボードが2台だし、ベースもジャズのようになつてベースじゃないし、フランク・ギャンバーのギターもジャズっていう感じじゃないんだけど、さうしたことのあるなんじみ深いものにこなれていた。以前、ずいぶん長いことジャズばかりきていたことがあって、いまはもう全くきていないのに、そのせいだとうと思う。だから、だんだんとおどろきがうすれていて、じ地ぶい眠けの中にいた。フランク・ギャンバーのヴォーカルも、天使の声ともいえるようで、ゆったりしてて実にじ地ぶい眠け。

そして、休けいをはんで、第2部になった。おわりの方で、私にはロックばく感じられる曲になったら、ぱっと目があいて、またギターとギターを弾いているフランク・ギャンバーの手に見られてしまつた。

私は、ジャズを広く深くわかる海にたとえれば、子どもがハチャハチャやって遊んでいる水たまりとでもいえるようなロックンロールの方がどうやら好きみたい。

WORDS: ハンス・ミュラー(「醜女の日記」中のピアニスト)

「拍手をする人間なんて、ぼくに絵がわかるくらいにしか音楽なんてわかりやしないんだ。セスらは、みんなお前で音楽会へ退屈しないくるんだ。最後の曲がすむと、セスらは吠えるんだ、解放されて」

アリニエ「醜女の日記」より。

SONG: "NOVEMBER RAIN" by AXL ROSE (GUNS & ROSES USE YOUR ILLUSION I)



NOVEMBER RAIN
(Rose)

WHEN I LOOK INTO YOUR EYES
I CAN SEE A LOVE RESTRAINED
BUT DARLIN' WHEN I HOLD YOU
DON'T YOU KNOW I FEEL THE SAME

CAUSE NOTHIN' LASTS FOREVER
AND WE BOTH KNOW HEARTS CAN CHANGE
AND IT'S HARD TO HOLD A CANDLE
IN THE COLD NOVEMBER RAIN

WE'VE BEEN THROUGH THIS SUCH A LONG LONG TIME
JUST TRYIN' TO KILL THE PAIN

BUT LOVERS ALWAYS COME AND LOVERS ALWAYS GO
AN NO ONE'S REALLY SURE WHO'S lettin' GO TODAY
WALKING AWAY

IF WE COULD TAKE THE TIME TO LAY IT ON THE LINE
I COULD REST MY HEAD
JUST KNOWIN' THAT YOU WERE MINE
ALL MINE

SO IF YOU WANT TO LOVE ME

THEN DARLIN' DON'T REFRAIN
OR I'LL JUST END UP WALKIN'

IN THE COLD NOVEMBER RAIN

DO YOU NEED SOME TIME, ON YOUR OWN
DO YOU NEED SOME TIME, ALL ALONE
EVERYBODY NEEDS SOME TIME, ON THEIR OWN
DON'T YOU KNOW YOU NEED SOME TIME, ALL ALONE

I KNOW IT'S HARD TO KEEP AN OPEN HEART
WHEN EVEN FRIENDS SEEM OUT TO HARM YOU
BUT IF YOU COULD HEAL A BROKEN HEART
WOULDN'T TIME BE BETTER TO CHARM YOU

SOMETIMES I NEED SOME TIME, ON MY OWN
SOMETIMES I NEED SOME TIME, ALL ALONE
EVERYBODY NEEDS SOME TIME, ON THEIR OWN
DON'T YOU KNOW YOU NEED SOME TIME, ALL ALONE

AND WHEN YOUR FEARS SUBSIDE
AND SHADOWS STILL REMAIN

I KNOW THAT YOU CAN LOVE ME
WHEN THERE'S NO ONE LEFT TO BLAME
SO NEVER MIND THE DARKNESS
WE STILL CAN FIND A WAY

CAUSE NOTHIN' LASTS FOREVER
EVEN COLD NOVEMBER RAIN

DON'T YA THINK THAT YOU NEED SOMEBODY
DON'T YA THINK THAT YOU NEED SOMEONE
EVERYBODY NEEDS SOMEBODY
YOU'RE NOT THE ONLY ONE
YOU'RE NOT THE ONLY ONE



THE COOL BEAUTY
ROSE